古代語における「打つ」を前項とする動詞連接「ウチ―」の展開

阿　部　　裕

1．はじめに

「打つ」を前項とする動詞連接[注1]（以下、「ウチ―」）には、前項が接頭辞であるものが存在する。

⑴　細やかにたを／＼として、物ウチ言ひたるけはひ、あな心ぐるし、とたゞいとらうたく見ゆ。　（源氏物語・夕顔）

⑴の「ウチ言ふ」には目的語「物」が存在するが、これは「言ふ」の内容であり、前項ウチの打撃の対象ではない。前項ウチは打撃を表す動詞として機能しておらず、後項「言ふ」に付属している。このような、「打つ」が本来の動詞としての機能を失い、後項動詞に付属する要素となったものが接頭辞ウチである。

動詞連接前項の接頭辞化は「ウチ―」のほか「トリ―」「カキ―」「サシ―」「ヒキ―」などでも観察されることから、日本語動詞連接における体系的な変化といえるが、動詞連用形接頭辞の歴史的展開についての研究の蓄積は少ない。しかし、前項が接頭辞である動詞連接は広義の複合動詞に含まれるものであり、かような動詞連接についての検討は古代語における複合動詞の存否の問題にも関連する重要な課題である[注2]。接頭辞を前項とする動詞連接の歴史的な様相を記述することは、日本語動詞連接史を構築する上で欠かすことができない。

本稿では、日本語動詞連接史構築の一端として、古代語における「ウチ―」の様相を中古を中心に考察する。接頭辞ウチは現代語では生産性を失っていることから、日本語史におけるいずれかの時点で発展し、そして衰退したといえる。しかし、「ウチ―」の歴史的な発展・衰退の過程はほとんど解明されていない。先行論では前項が接頭辞である「ウチ―」が上代から確認されること（阿部2012）、「ウチ―」が中古において急激に増加すること（阪倉1983、村田・前川2013）などが指摘されているが、中古における「ウチ―」の様相の記述は十分といえず、どのような「ウチ―」が増加したのかといった中古における発展の実態は明らかでない。そこで本

稿では、「ウチ―」を後項動詞の性質によって分類し、それぞれの中古における様相を記述する。これにより、先行論では明らかにされなかった「ウチ―」の発展の実態を把握することができると考える。また、上代の「ウチ―」の様相との相違にも触れる。

以下、上代の「ウチ―」の様相を簡単に確認し、それを踏まえて中古の「ウチ―」を前項が接頭辞である例を中心に検討する。前項が接頭辞かどうかの判定は、統語的特徴、後項の性質、文脈から総合的に行う。「打つ」にはヲ／φ格で示される目的語を伴う他動詞としての用法と、「霰ウツ」「波ウツ」のような非意志的自動詞としての用法があるが、いずれも打撃（強い接触）を伴う。したがって、打撃を表さず、後項動詞に付属していることが明らかな前項ウチは、接頭辞と判断できる。

2．上代の「ウチ―」

「ウチ―」の後項には、他動詞、意志的自動詞、非意志的自動詞がある。以下、「ウチ＋他動詞」をⅠ類、「ウチ＋意志的自動詞」をⅡ類、「ウチ＋非意志的自動詞」をⅢ類とする。⑵はⅠ類、⑶はⅡ類、⑷はⅢ類の「ウチ―」である。

⑵　我が宿の冬木の上に降る雪を梅の花かとウチ見つるかも（打見都流香裳）

（万葉集・巻８・1645・巨勢宿奈麻呂）

⑶　塩津山ウチ越え行けば（打越去者）我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも

（万葉集・巻3・365・笠金村）

⑷　ウチ靡く（打奈婢久）春ともしるく鶯は植木の木間を鳴き渡らなむ

（万葉集・巻20・4495・大伴家持）

上代のⅠ類は、前項が打撃を表すものも⑵のように接頭辞であるものも、ほとんどが具体的な目的語を伴う。Ⅱ類には「ウチ嘆く」のように後項が移動を表さない例もあるが、⑶のような移動動詞を後項とする例がまとまって確認される。「ウチ＋移動動詞」の前項に馬を鞭打つ意を認める立場もあるが（堀1986）、接頭辞である可能性が高いと見る立場もある（阿部2012）。「ウチ＋移動動詞」の他にも、Ⅱ類には前項が接頭辞であることが確実な例が存在する。[注3] Ⅲ類は前項が打撃を表すものも接頭辞であるものも、ほとんどが自然現象を表す。⑷は接頭辞の例である。

このように、上代の「ウチ―」は目的語を伴うⅠ類、移動動詞を後項とするⅡ類、自然現象を表すⅢ類が中心である。そして、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類のすべてにおいて前

項が接頭辞と認められる例が存在する。

3．中古の「ウチ―」

3.1　概要

各種索引を利用し、中古の和文資料に現れる「ウチ―」を調査した[注4]。その結果、「ウチ―」は異なり語数で380語得られた[注5]。そのすべてを(5)に示す。中古において3作品以上に用いられるものには下線を付した。

(5)　ウチ赤む（四段活用）、ウチ赤む（下二段活用）、ウチ上ぐ、ウチ欠伸ぶ、ウチ浅ふ、ウチ嘲笑ふ、ウチ遊ばす、ウチ遊ぶ、ウチ徒け好く、ウチ当たる、ウチ当つ、ウチ預く、ウチ合はす、ウチあばむ、ウチ荒る、ウチ合ふ、ウチ仰ぐ、ウチ扇ぐ、ウチ過つ、ウチ落ゆ、ウチ歩む、ウチ改む、ウチ顕す、ウチ顕る、ウチ洗ふ、ウチ荒る、ウチ諍ふ、ウチ急ぐ、ウチ出だす、ウチ出づ、ウチ言ふ、ウチ答ふ、ウチ入り来、ウチ入る（下二段活用）、ウチ動く、ウチ失ふ、ウチ嘯く、ウチ歌ふ、ウチ移す、ウチうつ伏す、ウチ項垂る、ウチ頷く、ウチ産む、ウチ呻く、ウチ倦んず、ウチ瑩ず、ウチ置く、ウチ起く、ウチ行ふ、ウチ抑ふ、ウチ貶む、ウチ落とす、ウチ音なふ、ウチ大人ぶ、ウチ驚かす、ウチ驚く、ウチおはします、ウチ生ひ出づ、ウチ追ふ、ウチ思す、ウチ仰せらる、ウチおほどく（四段活用）、ウチおほどく（下二段活用）、ウチ覆ふ、ウチ覚ゆ、ウチ思ふ、ウチ面痩す、ウチ下ろす、ウチ屈まる、ウチ屈む、ウチ掛かる、ウチ書く、ウチ掛く（下二段活用）、ウチ隠ればむ、ウチ隠ろふ、ウチ翔ける、ウチ囲む、ウチ挿頭す、ウチ重なる、ウチ重ぬ、ウチ畏まる、ウチかしづく、ウチかすむ（下二段活用）、ウチ数ふ、ウチ傾く（四段活用）、ウチ固む、ウチ語らふ、ウチ語る、ウチ勝つ、ウチ被く（四段活用）、ウチ被く（下二段活用）、ウチかなぐる、ウチ奏づ、ウチ交はす、ウチ替はる、ウチ変はる、ウチ買ふ、ウチ交ふ、ウチかふ（下二段活用）、ウチ返す、ウチ返り言つ、ウチ返る、ウチ顧みる、ウチ洟む、ウチ通ふ、ウチ薫る、ウチ聞く、ウチ聞こゆ、ウチ着す、ウチ消ゆ、ウチ霧らす、ウチ着る、ウチ霧る、ウチ切る、ウチ来、ウチ具す、ウチ屈す、ウチ下る、ウチ口覆ふ、ウチ口遊ぶ、ウチ加ふ、ウチ食ふ、ウチくぶ、ウチ曇る、ウチ暗がる、ウチ暮る、ウチ化粧ず、ウチけざやぐ、ウチ気色ばむ、ウチ消つ、ウチけぶる、ウチ試みる、ウチ毀す、ウチ零す、ウチ毀つ、ウチこほめ

かす、ウチ零る、ウチ毀る、ウチ籠む、ウチ子めく、ウチ越ゆ、ウチ御覧ず、ウチ殺す、ウチ声作りす、ウチ声作る、ウチ装束く、ウチ騒動(さうど)く、ウチ下ぐ、ウチさくじり引き奪ふ、ウチささめく、ウチ止す、ウチ冷ます、ウチさらぼふ、ウチ去る、ウチ戯(さ)る、ウチ猿楽(さるが)ふ、ウチ騒ぐ、ウチ頻る、ウチ敷く、ウチ時雨る、ウチ鎮まる、ウチ鎮む、ウチしつらふ、ウチ忍ぶ、ウチ偲ぶ、ウチしはぶく、ウチ縛る、ウチ潮垂る、ウチ湿る、ウチ霜枯る、ウチ知る、ウチしをる、ウチす、ウチ誦うず、ウチすかす、ウチすがふ、ウチ透く、ウチ梳く、ウチ過ぐ、ウチ過ぐす、ウチすげむ、ウチ過ごす、ウチ遊(すさ)ぶ、ウチ荒む、ウチ誦(ず)す、ウチ捨つ、ウチ誦んず、ウチ損なふ、ウチ注ぐ、ウチ側む（四段活用）、ウチ側む（下二段活用）、ウチ側むく、ウチ添ふ（四段活用）、ウチ添ふ（下二段活用）、ウチそぼる、ウチ染む、ウチ背く、ウチそよぐ、ウチそよめく、ウチ違ふ、ウチ叩く、ウチ畳(たた)なはる（四段活用）、ウチ畳(たた)なはる（下二段活用）、ウチ立つ（四段活用）、ウチ立つ（下二段活用）、ウチ辿り思ひ出づ、ウチ頼む、ウチ平らぐ、ウチ倒す、ウチ絶ゆ、ウチ弛む（四段活用）、ウチ弛む（下二段活用）、ウチ垂る、ウチ散らす、ウチ散る、ウチ使ふ、ウチ付く（四段活用）、ウチ付く（下二段活用）、ウチ継ぐ、ウチ繕ふ、ウチ続く（四段活用）、ウチ続く（下二段活用）、ウチ呟く、ウチ潰る、ウチ連る、ウチ調ず、ウチ解く（四段活用）、ウチ解く（下二段活用）、ウチ取る、ウチ眺む、ウチ鳴く、ウチ泣く、ウチ慰む、ウチ嘆く、ウチ為す、ウチ鳴(な)す、ウチなづらふ、ウチ名のる、ウチ靡く、ウチ直す、ウチ涙ぐむ、ウチ悩む、ウチなゆ、ウチなよぶ、ウチ鳴らす、ウチ成る、ウチ馴る、ウチ匂はし置く、ウチ匂ふ、ウチ寝、ウチ濡らす、ウチ濡る、ウチねぶ、ウチ眠る、ウチ退く、ウチ拭ふ、ウチ載す、ウチのたまはす、ウチのたまふ、ウチ伸ぶ、ウチ飲む、ウチ乗る、ウチ掃く、ウチ挟む、ウチ始む、ウチ恥ぢしらふ、ウチ恥ぢらふ、ウチ果つ、ウチ外す、ウチ外る、ウチ放つ、ウチはなやぐ、ウチ阻む、ウチ延ふ、ウチ羽振く、ウチはむ、ウチはやぐ、ウチはやす、ウチ早む、ウチ逸る、ウチ腹立つ、ウチ払ふ、ウチ腫る、ウチ僻む、ウチ光る、ウチ引く、ウチ弾く、ウチひそまる、ウチひそむ、ウチ独り言つ、ウチ広ぐ、ウチ更かす、ウチ吹く、ウチ振く、ウチ葺く、ウチ更く、ウチふくだむ、ウチ含む、ウチふくる、ウチ臥す、ウチふすぶ、ウチ塞がる、ウチ踏む、ウチ降る、ウチ振る、ウチ古る、ウチ振ひ祈る、ウチ振る舞ふ、ウチ古

めく、ウチ隔つ、ウチ細る、ウチほのめかす、ウチほのめく、ウチ頬歪む、ウチ微笑む、ウチ申す、ウチ任す、ウチ紛ふ、ウチ紛らわす、ウチ紛る、ウチ紛ればむ、ウチ勝る、ウチ混じる、ウチ混ず、ウチ微睡む、ウチ招く、ウチ真似ぶ、ウチ守(まぼ)る、ウチ守(まも)る、ウチ参る、ウチ身じろぐ、ウチ乱る（四段活用）、ウチ乱る（下二段活用）、ウチ見ゆ、ウチ見る、ウチ向かふ、ウチ向く、ウチむつかる、ウチ群る、ウチ廻る、ウチ持つ、ウチもてなす、ウチ物語らふ、ウチ物古る、ウチ盛る、ウチ休む（四段活用）、ウチ休む（下二段活用）、ウチ休らふ、ウチやつす、ウチやつる、ウチ破る、ウチ止む、ウチ遣る、ウチ歪む（四段活用）、ウチ歪む（下二段活用）、ウチ揺るぐ、ウチ許す、ウチ緩ぶ（四段活用）、ウチ緩ぶ（下二段活用）、ウチ寄す、ウチ世馴る、ウチ呼ばふ、ウチ読む、ウチ詠む、ウチ寄る、ウチ喜ぶ、ウチよろぼふ、ウチ捻ず、ウチ忘る、ウチ渡す、ウチ渡る、ウチわななく、ウチ侘ぶ、ウチ笑ふ、ウチ割る、ウチゐる、ウチ笑む、ウチ怨ず、ウチ拝む、ウチ折る

以下、前節と同様に「ウチ―」を後項動詞の性質によりⅠ類（ウチ＋他動詞）、Ⅱ類（ウチ＋意志的自動詞）、Ⅲ類（ウチ＋非意志的自動詞）に分け、中古の「ウチ―」の様相について具体例を挙げながら見ていく。また、上代との比較のために、Ⅰ類においては目的語を伴うか、Ⅱ類においては移動動詞を後項とするか、Ⅲ類においては自然現象を表すか、という点にも注目する。

3.2　Ⅰ類の「ウチ―」

3.2.1　目的語を伴うもの

⑹のような後項が打撃を伴う動作を表す「ウチ―」の前項ウチは、接頭辞ではなく、動作対象への打撃を表していると判断できる。

⑹　いと忍びて通ひたまふところの、道なりけるを思し出でて、門ウチ叩かせたまへど、聞きつくる人なし。（源氏物語・若紫）

一方、⑺～⑼には具体的な目的語が存在するが、「ウチ―」がそれらに対する打撃を表しているとは考えられないことから、前項ウチは接頭辞と判断できる。中古のⅠ類には、このような目的語に対する打撃を表さないものが多く見られる。

⑺　うたて思さるれば、太刀を引き抜きて、ウチ置きたまひ、右近を起こしたまふ。（源氏物語・夕顔）

⑻　墨、心とめて押し摺り、筆の先ウチ見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。　（源氏物語・野分）

⑼　君、召し寄せて、「昨日待ち暮らししを。なほあひ思ふまじきなめり」と怨じたまへば、顔ウチ赤めていたり。　（源氏物語・帚木）

⑺の「ウチ置く」は、太刀と太刀を置く場所との接触があることから前項ウチに打撃の意を認めて解釈することも不可能ではない。しかし、「ウチ置く」については「主体の意志性・意図性が弱く、対象への積極的な働きかけという面が弱い」という先行論の指摘もあり（近藤1997, p.15）、打撃を伴う動作とは考えにくい。また、「見る」「赤む」は接触を伴う動詞ではないため、前項ウチは打撃を表しえない。

3.2.2　目的語を伴わないもの

Ⅰ類の「ウチ―」には、具体的な目的語を伴わないものも非常に多く見られる。中でも、⑽～⒀のような発話や思考に関わる他動詞を後項とする例が目立つ。

⑽　ふしおきは、ただをさなき人をもてあそびて、「いかにして網代の氷魚にことはむ」とぞ、心にもあらでウチ言はるる。　（蜻蛉日記・上）

⑾　人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、ウチ語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばや、と思す。　（源氏物語・若紫）

⑿　うちとけずあはれをかはしたまふ御仲なれば、かくやむごとなき方に定まりたまひぬるを、ただならずウチ思ひけり。　（源氏物語・藤裏葉）

⒀　「人出でたまひなば、とくさせ。このごろ盗人いと多かなり。火危ふし」など言ひたるが、いとむつかしう、ウチ聞く人だにあり。　（枕草子・174段）

発話・思考に関わるⅠ類の「ウチ―」として、他に「ウチ思す」「ウチ誦す」「ウチつぶやく」「ウチのたまふ」「ウチ忘る」などが確認できる。かような「ウチ―」には目的語が存在せず、文脈的にも打撃を表すとは考えにくいことから、前項ウチは接頭辞と判断できる。

3.3　Ⅱ類の「ウチ―」

3.3.1　移動動詞を後項とするもの

前項が打撃を表すⅡ類の「ウチ―」は、存在するが少ない。「ウチ出づ」の例を挙げておく。「ウチ出づ」は移動動詞を後項とするが、中古には「口に出す」意の

例が多く、⒁のような例は稀である。

⒁　「おそし」とあれば、弁少将拍子ウチ出でて、忍びやかにうたふ声、鈴虫にまがひたり。　（源氏物語・篝火）

⒁　は前項後項がそれぞれ「打つ」「出づ」という動詞として機能し、「拍子を打って出る」という意味を表している。複合動詞ではなく、２つの動詞の連続である。移動動詞を後項とする「ウチ―」は、主に移動の起点・経由点・着点などの補語を伴う。中古には「ウチ越ゆ」「ウチ通ふ」「ウチ過ぐ」などが見られるものの、「ウチ越ゆ」は４例、「ウチ通ふ」は６例と少ない。「ウチ過ぐ」は21例確認されるが、時間が経過する意を表す例も含まれており、移動を表す例は多くない。

⒂　やり過して、今はたちてゆけば、関ウチ越えて、打出の浜に死にかへりていたりたれば、先立ちたりし人、舟に菰屋形ひきてまうけたり。　（蜻蛉日記・中）

⒃　かの四の君をも、なほかれがれにウチ通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婿の中にも入れたまはず。　（源氏物語・賢木）

「ウチ出づ」は、上代には場所の移動を表していたのだが、中古においては⒄のように「思っていることを口に出す」意で使用される。

⒄　人のむすめのかしづく、いかでこのおとこに物いはむと思けり。ウチ出でむことかたくやありけむ、物病みになりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」と言ひけるを、　（伊勢物語・45段）

「出発する」意からの変化によって「口に出す」意が成立したのか、「出発する」意とは無関係に「口に出す」意が成立したのかについては不明である。

3.3.2　移動動詞を後項としないもの

中古のⅡ類には、移動動詞を後項としないものが多く確認できる。

⒅　「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、ウチ頷きて、いとようありなむ、と思したり。　（源氏物語・若紫）

⒆　心得ず、ウチ傾きたまへるに、つつみに衣箱の重りかに古代なる、ウチ置きて押し出でたり。　（源氏物語・末摘花）

⒇　ウチ臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。（源氏物語・若紫）

(21)　まして、ここかしこにウチ忍びて通ひたまふ所どころは、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも多かり。　（源氏物語・葵）

⒅〜㉑は「頷く」「首をかしげる」「横になる」「人目を避ける」といった意志的な動作を表すが、打撃の対象は存在せず、前項ウチは接頭辞と認められる。

3.4　Ⅲ類の「ウチ―」

3.4.1　自然現象を表すもの

自然現象を表すⅢ類においても、前項が接頭辞であるものが多く見られる。㉒は前項が打撃を表す例、㉓〜㉖は接頭辞と考えられる例である。

㉒　もとごとに波ウチ寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。　（土佐日記）

㉓　またの日、雪ウチ降り、空のけしきもものあはれに、過ぎにし方行く先の御物語聞こえかはしたまふ。　（源氏物語・若菜上）

㉔　雪ウチ散りて艶なる黄昏時に　（源氏物語・朝顔）

㉕　日は出でたれども、空はなほウチ曇りたるに、　（枕草子・見物は）

㉖　風冷ややかにウチ吹きて、やや更けゆくほどに、　（源氏物語・紅葉賀）

「ウチ寄す」は、波が岸に寄せる様子を表す複合動詞として定着していたと考えられる。(注6)中古の「打つ」には単独で波を主体とする例(注7)があることから、前項ウチは「波が岸を打つ」意を残していると見てよいだろう。

「ウチ降る」は本来的には雨の降るさまを表していたが(注8)、中古には雪を主体とする例が現れる。前項ウチは本来的には「雨が地を打つ」意を含んでいた可能性が高いと思われるが、雪が地面に落ちる際に打撃が生じるとは考えにくい。したがって、雪を主体とする㉓のような例の存在から、中古の「ウチ降る」においては前項ウチの「地を打つ」意が失われていたことが窺える(注9)。

「ウチ散る」「ウチ曇る」「ウチ吹く」はいずれも接触を伴う動きではなく、打撃を表すとは考えられないことから、前項ウチは接頭辞と判断できる。

3.4.2　自然現象ではないもの

自然現象を表さないⅢ類の「ウチ―」が、中古には非常に多い。

㉗　いみじうものをあはれと思して、所どころウチ赤みたまへる御まみのわたりなど、言はむ方なく見えたまふ。　（源氏物語・明石）

㉘　風につきて吹きくる匂ひのいとしるくウチかをるに、ふとそれとウチ驚かれて、　（源氏物語・総角）

(29)　「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ」とのたまへば、「いかでまからん、暗うて」と言へば、「あな若々し」とウチ笑ひたまひて、

（源氏物語・夕顔）

(30)　またゐたる大人、「げに」とウチ泣きて、　（源氏物語・若紫）

(31)　はじめこそ心にくもつくりけれ、今はウチ解けて、　（伊勢物語・23段）

これらの「ウチ―」はいずれも打撃を伴う動きを表しておらず、前項が接頭辞であることは明らかである。人の表情や心的状態を表すものが目立つ。

「ウチ笑ふ」「ウチ泣く」といった表情を表す「ウチ―」として、ほかに「ウチ笑む」「ウチ微笑む」「ウチ涙ぐむ」などが存在する。

心的状態を表す「ウチ―」で最も用例が多いのは「ウチ解く」であり、中古に257例確認された。「心を許す」「くつろぐ」「油断する」といった意を表す複合動詞として定着していたことは明らかである。なお、「解く」が単独で使用される場合には、恨み、心、官職、雪、氷、紐などが解ける意を表すが、「ウチ解く」は心的に解ける意に特化しており、官職、氷、紐などが解ける意で用いられる例はほとんど見られない。和歌などには氷や露などを主体とする「ウチ解く」が僅かに出現するが、これらも「心を許す」といった心的内容を含意している。(注10)

4．「ウチ―」の発展の過程

4.1　上代と中古の相違

以上、中古の「ウチ―」の様相を観察した。「ウチ―」はⅠ類からⅢ類の全てにわたって多く見られるが、その大部分は接頭辞を前項とするものであり、接頭辞ウチによる動詞連接の生産が中古において盛んに行われていたことが分かる。

2節で確認したように、上代の「ウチ―」は目的語を伴うⅠ類、移動動詞を後項とするⅡ類、自然現象を表すⅢ類が中心であった。しかし、前節で見てきたように、中古にはこの様相が一変する。

まずⅠ類は、前項が目的語に対する打撃を表さない「ウチ―」が大幅に増加する。また、上代にはほとんど見られなかった目的語を伴わないⅠ類が中古になって出現し、「ウチ言ふ」など発話・思考を表すものを中心に非常に多く確認される。

Ⅱ類は、「ウチ＋移動動詞」が少ないことが上代との違いとしてまず挙げられる。上代には「ウチ越ゆ」が7例、「ウチ行く」が5例、「ウチ出づ」が3例見られるの

だが（阿部2012）、中古に残るのは「ウチ越ゆ」のみである。その「ウチ越ゆ」も４作品に各１例ずつ見られるのみであり、上代と比べて使用頻度は明らかに低い。また「ウチ行く」は中古以降には用例が確認できず、「ウチ出づ」は「口に出す」意に転じている。このように「ウチ＋移動動詞」が減少した一方で、上代には「ウチ嘆く」や「ウチ靡く」（横になる意）など少数しか確認されなかった移動動詞ではない意志的自動詞を後項とする「ウチ―」が、中古には多く見られるようになる。

Ⅲ類においては自然現象を表すものが引き続き見られるが、雪を主体とする「ウチ降る」の出現や、「ウチ吹く」など上代には見られない例の存在から、用法が拡大していることが分かる。また、「ウチ解く」など自然現象ではなく人の表情や心的状態を表すⅢ類が中古に新たに出現する。

このように、中古には目的語を有さないⅠ類、移動動詞を後項としないⅡ類、自然現象を表さないⅢ類といった、上代には見られない、あるいは少ないタイプの「ウチ―」が増加している。Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類の全てにおいて後項動詞の種類が顕著に拡大しており、打撃と無関係な「ウチ―」が多量に確認されることは、上代から中古にかけて接頭辞ウチによる複合動詞生産が著しく発達したことを示している。

4.2　中古の時期区分

では、このような「ウチ―」の発達は中古のどの時期に起こったものなのだろうか。阪倉（1983）、村田・前川（2013）では、「ウチ―」の使用率が中古の後半に入って急激に高くなることが指摘されている。(注11)「ウチ―」の発展の過程をより詳細に示すためには、中古の前期と後期の差異を見る必要がある。

本稿で中古とする時期は、平安遷都の794年（８世紀末）から院政開始の1086年（11世紀末）の約300年間である。以下、８世紀末から10世紀前半までを前期、10世紀後半から11世紀末までを後期とし、中古前期と中古後期の差異を観察する。

4.3　中古前期

「ウチ―」が豊富に得られる文献の多くは中古後期の成立であり、中古前期の成立とされるのは『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『古今集』に限られる。ここでは散文３作品の「ウチ―」を取り上げる。韻文である『古今集』は別に扱う。

中古前期散文に用いられる「ウチ―」は次の通りである。上代と共通する形態に

は下線を付し、()内に用例数を示した。

(32) 竹取物語：ウチ上ぐ(1)、ウチ出づ(1)、ウチ入る（下二段活用）(1)、ウチ懸く(1)、ウチ着す(1)、ウチくぶ(1)、ウチ過ぐ(1)、ウチ潰る(1)、ウチ嘆く(2)

土佐日記：ウチはむ(2)、ウチ群る(1)、ウチ寄す(3)

伊勢物語：ウチ出づ(1)、ウチ解く(1)、ウチながむ(1)、ウチ泣く(3)、ウチ寝(1)、ウチ臥す(1)、ウチ物語らふ(1)、ウチ遣る(1)、ウチわぶ(1)

中古後期と比べて文献の量が少ないという問題はあるが、中古に確認される「ウチ―」380語のうち20語しか見られず、「ウチ―」の使用は少ないといえよう。また、『伊勢物語』を除き上代と共通する「ウチ―」が目立つ点も注目される。中には「ウチ出づ」のように上代と比べ用法が変化しているものもあるが、「ウチ―」全体の様相としては、上代との間に目立った差異は認められない。

ただし、「ウチ潰る」「ウチ泣く」「ウチ解く」「ウチわぶ」など上代には見られない表情や心的状態を表すⅢ類が少ないながらも確認できることから、上代から中古前期にかけて新たな「ウチ―」が生産されていたと考えられる。しかし、中古後期には非常に多い発話・思考を表すⅠ類の「ウチ―」が中古前期には見られない。このことから、前期における「ウチ―」の生産は後期ほど活発でなかったと推測される。これは、「ウチ―」の使用率が中古後期以降の作品においてに急激に高まるという阪倉（1983)、村田・前川（2013）の指摘とも合致する。

4.4　中古後期

中古に見られる「ウチ―」380語のうち、339語は中古後期に初出する。文献の量を考慮すると、中古前期から使用されていたものの文献には出現しなかった「ウチ―」も一部には存在すると思われる。しかし、中古後期の「ウチ―」は異なり語数・のべ語数がいずれも極めて多いこと、発話・思考を表すⅠ類のように中古後期になって初めて出現するタイプの「ウチ―」が存在することから、中古後期に「ウチ―」が爆発的に増加したことは明らかであろう。

中古に初出する「ウチ―」には、社会的に定着していたと考えられるものと、個人の臨時的な造語と考えられるものがある。厳密にはそれぞれの「ウチ―」で個別に考察する必要があるが、ごく単純に考えれば、複数の作品で使用される「ウチ―」は社会的に定着していた複合動詞である可能性が高い。例えば、「ウチ言ふ」は12

作品に計37例、「ウチ語らふ」は11作品に計70例、「ウチ笑ふ」は11作品に計198例、「ウチ泣く」は15作品に計215例見られるが、これらはいずれも定着していたと見てよいだろう。中古後期に初出する「ウチ―」339語のうち、113語は３作品以上で使用される。すなわち、中古後期に初出する「ウチ―」の30％以上は既に定着していたものと考えられる。中古前期には見られなかった「ウチ―」の多くが中古後期には定着していたと見られることは、興味深い。

中古後期には、複数作品で安定的に使用された「ウチ―」が存在する一方、1作品のみに現れる「ウチ―」も少なくない。㉝にその例を挙げる。

㉝　まいて、ウチ徒け好きたる人の、年つもりゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。　（源氏物語・朝顔）

阪倉（1983）が「一作品に限り表われてくる「うち動詞」を、その作品の「独自語」と呼ぶことにするが、これは、その作品（作者）における新造語というように、一往は見なしてもよいであろう」（p.6）と述べるように、１作品のみに使用される「ウチ―」は、その作品を著した人物が独自に生み出し、他者に広まることのなかったものと考えられる。中古後期の「ウチ―」のうち、「独自語」と見られるものは139語にのぼる。「独自語」としての「ウチ―」は中古前期には『竹取物語』『伊勢物語』に各１例と少なく、中古後期の『源氏物語』（39語）、『枕草子』（18語）、『宇津保物語』（16語）などに多く出現する。このような「独自語」としての「ウチ―」が多数出現することは、接頭辞ウチによる造語が個人レベルで盛んに行われていたことを示しているといえよう。

4.5　まとめ

以上、上代と中古に存する「ウチ―」の様相の差異と、中古前期から後期にかけての「ウチ―」の発展を見た。中古前期には上代には見られないタイプの「ウチ―」も存在はするものの、上代と共通する「ウチ―」も多く、全体としては上代との間に目立った違いは見られない。ところが中古後期に入ると、「ウチ―」の後項となる動詞の幅が急激に拡大し、「ウチ―」は異なり語数・のべ語数ともに顕著に増加する。これは、接頭辞ウチによる動詞連接の生産が非常に活発に行われた結果である。先行論によって指摘されてきた平安中期以降における「ウチ―」の使用率の急激な高まりは、発話・思考を表すⅠ類や、移動動詞を後項としないⅡ類、表情・心

的状態を表すⅢ類など、上代から中古前期には見られない、あるいは少ないタイプの「ウチ―」が中古後期に大量に出現したことによるものといえるだろう。

中古後期に初出するタイプの「ウチ―」には、社会的に定着していたと考えられるものから個人によって臨時的に作られたと考えられるものまで存在する。多くの「ウチ―」が定着している中で、新たな「ウチ―」が盛んに創出された結果として、中古後期に「ウチ―」が爆発的に増加したと考えられる。

5．テキストによる相違

資料が韻文に偏る上代と、散文・韻文がいずれも豊富な中古には、テキストの性質の相違が存する。そのため、上代から中古にかけての「ウチ―」の発展に関しては、それがテキストの相違によるものでないことを確認する必要がある。

純粋に上代と中古を比較するためには、韻文同士で比較しなければならない。中古の韻文として『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』を調査したところ、⑶④の30語が得られた（上代と共通するものには下線を付した）。散文も合わせた「ウチ―」の総数が380語であることから、「ウチ―」は韻文には少ないといえよう。

⑶④　<u>ウチ出づ</u>、<u>ウチ懸く</u>、<u>ウチ交</u>はす、ウチ返す、<u>ウチ霧らす</u>、ウチ着る、ウチ消つ、ウチ試みる、<u>ウチ越</u>ゆ、ウチ騒ぐ、ウチしきる、ウチ忍ぶ、ウチ棄つ、ウチ添ふ、ウチそよぐ、ウチ叩く、ウチ解く、<u>ウチ靡く</u>、ウチ寝、<u>ウチ濡らす</u>、<u>ウチ羽振く</u>、<u>ウチはふ</u>、<u>ウチ払ふ</u>、ウチ吹く、ウチ伏す、<u>ウチ見る</u>、<u>ウチ群る</u>、<u>ウチ寄す</u>、<u>ウチ渡す</u>、ウチわぶ

ここから、中古の勅撰和歌集では上代と共通する「ウチ―」が約半数を占めることが分かる。『万葉集』の和歌をそのまま収載したものや、「ウチ出づ」のように用法が変化しているものもあるが、上代の韻文との間に顕著な差は見られない。

注目されるのは、発話・思考を表すⅠ類の「ウチ―」や表情・心的状態を表すⅢ類の「ウチ―」など、中古後期に著しく増加するタイプが勅撰集には非常に少ない点である。これらは韻文には使用されにくいものであった可能性がある。しかし、かような「ウチ―」は中古前期の散文にも少ないことから、中古後期の散文における増加はテキストの相違のみによるものではないと判断できよう。

上代と中古前期散文・中古韻文は、新たな「ウチ―」の出現がありつつも、顕著な差は認められず比較的類似した様相であるといえる。これに対し、中古後期散文

は上代・中古韻文や中古前期散文と大きく異なる様相を示す。「ウチ―」の増加は、中古後期の散文において特に顕著なのである。

6．今後の課題

上代から中古の「ウチ―」に関する残された課題として、中古後期散文において「ウチ―」が大量に使用された理由の解明と、動詞「打つ」が接頭辞ウチに変化していくプロセスの解明が挙げられる。

中古後期散文に「ウチ―」が多量に出現する理由の解明は容易ではないと思われるが、接頭辞ウチの機能や、本稿で明らかにした「ウチ―」の増加の実態を手掛かりとして検討するしかないであろう。中古における「ウチ―」の意味的機能については阪倉（1983）、関（1993）、近藤（1996、1997、1998ab、1999、2001）などの先行論があり、現在最も有力であるのは近藤の主張する「弱意」である。しかし、接頭辞ウチの機能が弱意であると判明したとしても、それが何故中古後期に増加するのかについては別に説明が必要である。今後の課題としておきたい。

この問題に関しては、中古後期における「ウチ―」の生産・使用が、当時の貴族をはじめとした話者の間で実際に行われていたのか、あるいは実際に使用していたのはごく一部の「ウチ―」であり、それらからの類推によって文学作品のために大量に生み出されたのか、という観点も必要である。

また、村田・前川（2013）によれば中古後期に顕著な増加を見せるのは「ウチ―」のみであり、同じく前項が接頭辞化する「トリ―」や「カキ―」には目立った増加は見られないという。これらと「ウチ―」との相違点も追究したい。

「ウチ―」は上代から前項が接頭辞である例が認められるため、接頭辞化のプロセスは上代・中古における「ウチ―」の様相から推定するしかない。「打つ」の接頭辞化は、自立形式から非自立形式への変化という点で、文法化の一種と位置づけることができる。どのような要因によって打撃の意味が希薄化し、接頭辞となったのかについて、「打つ」の意味素性にも注目しながら検討していきたい。

中世以降の「ウチ―」については、その衰退の時期と要因を明らかにすることが課題である。「ウチ」の意味の歴史的変遷については近藤（1996、1999、2001）に考察がある。近藤によれば、『今昔物語集』『覚一本平家物語』『土井本太平記』といった文献に出現する「ウチ―」には、「弱意」よりもむしろ「強意」で解すべき

例が出現するという。しかし、中世以降の「ウチ―」についての先行論は非常に少なく、また内容も意味変化の検討に偏る。中古に見られた「ウチ―」380語のうち、現代語に残るものはわずか29語（約7.6%）である。[注12] すなわち、「ウチ―」の大部分は中世以降のいずれかの時点で姿を消したのである。「ウチ―」の歴史的変遷を明らかにするためには、中世以降における様相の記述が必須である。

注

（1）本稿では〈動詞連用形＋動詞〉形態の名称として「動詞連接」を用いる。動詞連接のうち、前項と後項が一体化しているものを「複合動詞」とする。

（2）この問題については、青木（2013）に詳しくまとめられている。

（3）昼暮らし 夜わたし聞けど 聞くごとに 心つごきて ウチ嘆き（宇知奈氣伎）あはれの鳥と 言はぬ時なし （万葉集・巻18・4089・大伴家持）

（4）索引による調査を行った作品は次の通り。『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『多武峯少将物語』『平中物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『宇津保物語』『大和物語』『三宝絵』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『栄花物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』。

（5）3つ以上の動詞が連続するもの（例「ウチ越え行く」）は、第1項と第2項の連続（例「ウチ越ゆ」）として数えた。3連以上のものしか見られない「ウチ―」は3連のまま数えた。

（6）上代には「駿河」の枕詞として使用される。「波の打ち寄せる駿河」の意と解釈される。
なまよみの甲斐の国ウチ寄する（打縁流）駿河の国と （万葉集・巻3・319）

（7）風吹けば浪ウツ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべら也 （古今集・671）

（8）上代の「ウチ降る」には雨を主体とする例のみが見られる。
ひさかたの雨ウチ降らば（雨打零者） （万葉集・巻8・1485）

（9）雨に関する用例のある「ウチ―」として、「ウチ降る」のほかに「ウチす」がある。
時雨ウチしてものあはれなる暮つ方、 （源氏物語・葵）

（10）今は早ウチ解けぬべき白露の心置くまで夜をや経にける （後撰集・284・大輔）

（11）阪倉（1983）は「ウチ―」の使用率が『落窪物語』『源氏物語』といった「平安中期以後の、特にいわゆる日記物語の全盛期とされる時代の作品」（p.10）において急激に高くなることを指摘し、村田・前川（2013）はその事実をより詳細なデータで示した。

（12）国立国語研究所「複合動詞レキシコン」（http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/）を用いた。

使用文献

・万葉集…鶴久・森山隆編『萬葉集』おうふう

・伊勢物語…日本古典文学大系『竹取物語 伊勢物語 大和物語』岩波書店
・土佐日記…日本古典文学大系『土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』岩波書店
・蜻蛉日記…佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引 本文篇』風間書房
・枕草子…松村博司監修、榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美編『枕草子総索引』右文書院
・源氏物語…日本古典文学全集『源氏物語』(1)〜(6) 小学館
・古今和歌集…新日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店
・後撰和歌集…新日本古典文学大系『後撰和歌集』岩波書店

参考文献

阿部裕（2012）「上代日本語の動詞連接ウチ―について」日本語学会2012年度秋季大会（於富山大学） 口頭発表
青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて』pp.215-241 ひつじ書房
近藤明（1996）「「ウチワラフ」の意味の時代的変化―「ウチ動詞」の意味変化の一例―」『国語語彙史の研究 十六』pp:175-192 和泉書院
近藤明（1997）「中古における「ウチ＋他動詞」の意味―源氏物語の場合―」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』pp.9-25 明治書院
近藤明(1998a)「「ウチカヘス」考―「ウチ」が接辞化しているものの場合―」『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』47:pp.9-18 金沢大学
近藤明（1998b）「中古における「ウチ＋主体変化動詞」の意味―源氏物語の場合―」佐藤喜代治編『国語論究7 中古語の研究』pp.131-157 明治書院
近藤明（1999）「土井本太平記における「接頭辞ウチ＋動詞」の意味」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』pp.87-103 明治書院
近藤明（2001）「「ウチツヅク」考」『国語語彙史の研究 二十』pp.173-185 和泉書院
阪倉篤義（1983）「接頭語「うち」の消長」『国語語彙史の研究 四』pp.1-20 和泉書院
関一雄（1993）『平安時代和文語の研究』笠間書院
堀勝博（1986）「「うちわたす」の考察」『ことばとことのは』3:pp.45-59 あめつち会 和泉書院
村田菜穂子・前川武（2013）「動詞由来の接頭辞についての通時的考察」『国語語彙史の研究 三十二』pp.135-147 和泉書院

〈付記〉本稿は、名古屋大学国語国文学会平成26年度秋季大会において口頭発表した内容を修正したものである。発表に際してご意見・ご指導を賜った方々に御礼申し上げる。

（あべ・ひろし／愛知工業大学非常勤講師）